第616号平成8年9月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

中華民国訪日友好登山隊・同行記

神崎忠男

歓迎会で記念のペナントを手に蔡会長（左）と村木会長（右）

■豪雨の中の歓迎会

一九九六年七月十日午後四時半、烈しく雨が降る羽田国際空港到着ロビーで、松田雄一、小倉茂暉、木村俊博、神崎のJAC役員は、中華民国訪日友好登山隊一行を今や遅しと待ち構えていた。日比谷公園「松本楼」で今夜七時から歓迎会を設定しているのだ。時計を見て気をもんでいると、蔡禮樂隊長を先頭に台湾の岳友三十八名が、やっと姿をみせた。

直ちにバスで宿舎の銀座第一ホテルへ向かう。相変わらず雨足は強い。荷物を置き、着替えもそこそこに再びバスに乗り、日比谷公園まできたが、バスが大型すぎて園内に入れない。「雨でバスから出られないぞ」と誰かが興奮気味に叫んでいる。会場で待機していた何人かが傘を持って出迎えにくる。開宴時間はとうに過ぎ、到着早々の遭難(?)騒ぎに、担当者としてはハラハラドキドキ、台湾から台風まで御到来とは！

歓迎会の出席者は、台湾ゲスト四十名、会員百六十名と大所帯である。都心としては樹木が多く庭園の趣のある松本楼のテラスを使って、喜んでいただけるレセプションをイメージしていたのが、この風雨。ともかく大谷亮海外連絡担当理事の司会で開会。会場は狭く、迎える人、迎えられる人とも大変だったが、一人ひとりがこの場を国際交流の場と意識して、楽しい交流となった。

帰路も雨との闘いで、明日からの山行を心配しながら、ドタバタも歓迎に花を添えてくれたかな、と失敗をカバーする心境で苦笑いが出る。

今回のように、外国から登山者を四十名も迎えての公式国際交流は日本山岳会としては初めてのことである。アメリカからシエラクラブの方

1996年（平成8年）
9月号（No.616）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

中華民国訪日友好登山隊同行記… 1
日本山岳会の歩みの中から－山・人と地質について…… 3
訃報・千谷壮之助会員…… 5
海外の山　日本人の山、K2…… 5
報告
古き道を尋ねて…… 6
講演会・カジタのピッケル…… 6
真夏の撮影会…… 7
二火会・森林勉強会…… 8
95同期会第1回懇親山行…… 8
山の切手・初登頂周年記念Ⅰ…… 7
支部だより…… 9
青森支部　山形支部
東西南北
尾瀬沼・魚の大量死……10
マレーシア山岳協会とエベレスト計画……10
新生を目指す土曜会……11
20年ぶりのインド……11
三田幸夫氏からの手紙……12
白神山地の旅……12
短歌・滝の小屋にて……13
図書紹介……14
図書室受入報告……15
新入会員・住所変更……16
INFORMATION ……17
会務報告……18
山と医療・山の外傷と破傷風……19
会員異動・ルーム日誌……19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10〜20時
水・金曜日　13〜20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13〜20時

方が来日された時は自主的な計画で、海外担当者が一緒に山に行ったり、ポーランド、アラスカなどの場合は海外委員会または会員個人のレベルでの交流であった。

台湾の岳友との交流は一昨年、日本からの訪中親善登山団（藤平正夫隊長）派遣の延長であり、日本山岳会村木潤次郎会長宛の公式書簡に基づくものである。台湾側の資料に、過去台湾へ登山に出かけ、中華民国山岳協会にお世話になった日本隊は七百七十一隊・六千二百八十名という記録が残っている。

こうした背景があるので、村木会長もとくに心をくだかれ、「日本山岳会としてもできる限りのことをしたい。少なくとも失礼のないようにお迎えし、山登りにあっては安全に」と指示された。そこで宮下秀樹副会長を中心に、海外連絡委員会、山研委員会、台湾の岳人と親しい会員、さらに台湾でお世話になった会員で迎える準備を進めた。登山に関しては田中弘美信濃支部長をはじめとする支部会員、山小屋友好会などの協力を得て、台湾の岳友に喜んでもらえるよう環境を整えてきたのである。

■七月十一日・上高地

昨夜の雨は何だったのだ、と思わせるほどの台風一過の青空である。地の利を考えてチャーターした松本電鉄のバスが宿舎の前に待機している。小倉、松田、木村会員が添乗して、いよいよ出発。A隊・槍ヶ岳登山十六名、B隊・奥穂高岳登山十三名、C隊・上高地散策九名の三グループに分けての、山研をベースとした三泊四日の登山である。もっとも山研のみでは収容に無理があり、計画をスライドさせたり、上高地西糸屋さんのお世話になった。

上高地に到着後、A隊の槍ヶ岳組はそのまま横尾まで入山し、横尾山荘にお世話になる。奥穂高岳、上高地散策組のB・C隊は山研に宿泊。

■七月十二日・槍ヶ岳、涸沢へ

いよいよ登山開始。その支援として槍ヶ岳のA隊には、信濃支部の宮川良雄、古幡開太郎、田中聡、穂苅康治、北林幹男、岐阜支部の宗宮真、静代夫妻、東京から吉永英明、棚橋靖の九会員が同行。B隊の奥穂高岳には信濃支部の金子丞二、武田武人、岐阜支部の森本市郎、高橋妙子、東京から絹川祥夫、神崎の六会員が付き添う。C隊の上高地散策には名古屋の平林秀雄、関西の中谷絹子、そして田中信濃支部長、東京から村木会長、松田、小倉、木村会員も加わる。

また山研では、交流の盛り上がりを実感すると同時に、それを支える人々に大変な苦労をおかけした。管理人の内田二葉さんをはじめ、坂本正智、岡部みち子、松田柳子、織田沢美知子、倉持ノリ子、藤田礼子、内田充子ら各会員が手弁当で奉仕してくれた。深く感謝するとともに、これが山岳会の強さかとも感じた。

山よし、空（天気）よし、人もよし、といったところで登山隊は出発。台湾の岳友はどちらかというと南国育ちの高齢者隊。雪上歩行に苦戦しながらも、勢いで槍沢、涸沢の雪渓を踏破。A隊はこの日のうちに山頂に立ち、槍ヶ岳山荘に宿泊。B隊はザイテングラードの登りを翌日に残し、涸沢小屋に泊まる。

■七月十三日・奥穂の頂に立つ

心配された蔡禮樂隊長も元気、隊員の皆さんも登攀意欲満々である。

五時起床、六時の朝食後、直ちに出発。穂高涸沢のスケールにのまれながらも雪渓に興奮し、いきり立っての頑張り登山で、昼近くには白出のコルの奥穂高岳山荘に到着。今夜はここに宿泊の予定なので、昼食を済ませてから頂上へ向かう。

コルからルートを目で追うと、急な岩壁に鉄梯子が垂直にかけられている。「神崎さん、あれ登るんですか……」「ハイ、でも梯子を避けて、ほかのルートを岩壁登攀でもしますか？」と冗談をいうと、何ともいえない顔をして「あれでイイ、あれでイイ」と梯子を指されたが、なぜか私の腹を見て笑っているような目が印象的だった。

梯子登りで高度は稼げるものの、目指す奥穂のピークが見えず、いらだっている人もいたようだが、遠くに槍ヶ岳を望み、A隊はすでにあの頂きに登っただろうと話すと、自分たちも頑張らなきゃという気持ちなのか、急にピッチが上がった気がした。頂上直下にきてかなり足元もしっかりしている。

ワイワイガヤガヤ、頂上に立った。さあ、中華民国山岳協会旗とともに記念撮影をと思ったら、A隊が旗を全部持っていってしまったことに気がついた。それでも日本第三の高峰に立ち、満足して写真を撮り、景色を楽しんだ。天気は最高。遠く白馬、劔、立山、槍、すぐ側のジャンダルム、前穂、西穂、焼、乗鞍、そして南ア、中央ア、八ヶ岳、富士山までの大パノラマ展望。梓川の両岸に点在する赤い屋根の箱庭のような上高地。不安と疲労の分だけ、喜びが大きな感動になったようだ。

■七月十四日・雪渓を下る

今朝は昨日のような好天とはいかないが、天候より雪渓下りの安全が気がかりだ。「さあ、慎重に下りましょう」と誰かが声をかける。昨日登ってきたルートだから状況が分かっているだけに不安を感じる人もいる。

「あの雪のところを下りられますかねえ」と聞いてくる。「気合いを入れろ！　馬鹿野郎！　下りなきゃ帰れないだろう！」と言いたいところだが、そこは国際交流。「大丈夫ですよ。登ったところだから。足元しっかりしてるじゃないですか」なんて具合に気持ちや足を騙しながらの下山。

万が一滑ったら……と思うと、下部が危険な場所ではこっちの気持ちが滅入ってしまう。「荘さん、ザイル出そうよ」と声をかけると「日本の誰かがザイルは要らない、上高地に置いていったらって言ったから、ボク置いてきたよ」の返事。事前に台湾まで行って、各隊ザイル二本、各自ストック持参と打ち合わせてきたのに、少々感情的にムッとしたが、そこは国際交流。「あーそう」で終わってしまった。しかし、事故が起きたら「あーそう」では済まない。同行の金子リーダー、武田サーダー、絹川シェルパの大活躍が頼もしい。彼等の働きと機転の素晴らしさはヒマラヤのシェルパ以上である。台湾の岳友たちに安心感を与え、無事涸沢へ下山した。

■七月十五日・松本城を見学し帰京

山研で一夜を明かし、帰路に着く。

途中、松本市のご協力で松本城を無料見学、昼食までご馳走になる（信濃支部の尽力が大きい）。田中支部長、蒲生元支部長の案内で、村木会長、蔡禮樂訪日友好登山隊長ほか何人かが松本市長を表敬訪問。

夕方五時頃、銀座第一ホテルに帰着。登山活動を解散し、同時に公式行事の交流登山を終了した。

■末永い日華友好を

台湾の岳友たちは個人のスケジュールで滞在、十六日と二十一日の二組に別れて帰国した。

その後頂戴する、手紙の喜んでいただけたらしい文面から、何はともあれよき国際交流だったと思いたい。多くの方々の様々なご協力、ご支援で、今回の国際交流が成功裡に終わったことを担当者の一人として深く感謝している。日華友好が末永く続くことを祈念して、報告の一端とさせていただきます。

速報・K2（8611m）登頂

K2登山隊1996は最終キャンプ(7960m)を設営。アタック態勢にあったが、8月12日、14日の二次にわたる登攀で12名が登頂に成功した。

●8月12日（第一次アタック隊）
松原、谷川、赤坂、村田、吉田、椎名

●8月14日（第二次アタック隊）
山本、稲葉、長久保、竹内、佐野、高橋

●なお、9月1日全員元気で帰国した。

日本山岳会の歩みの中から
山・人と地質について

神戸信和

■入会の経緯

私はつくば学園都市にある通産省工業技術院地質調査所で、国土の地質を明らかにする地質図幅作成業務に携わり、十数年は地質標本館の創設計画に参画し、館長を勤め、定年退官した地質学古生物学の研究者である。私と日本山岳会との関わりは、一九九三年八月、その調査所の地質標本館で二火会のメンバーを案内したことにはじまる。

翌年、山岳会のルームで二火会主催の「身近に見られる地球の歴史―地層、岩石、化石など」と題した講演会、現地見学会として三浦半島城ヶ島の地質観察に出かけるなど、「地質」を話題に二火会とのおつき合いが深まり、お誘いを受けて九四年九月、日本山岳会に入会した。

■日本山岳会の歴史に見る地質

日本山岳会小史（創立九十周年記念誌）によれば一九〇五年十月十四日、東京飯田橋の富士見楼という料亭で設立に関する最終的な打ち合わせがなされ、この日が「日本山岳会創立の日」とされている。創立は、間接的にはイギリスの宣教師ウオルター・ウエストンと、地理学者志賀重昂の教示により、直接的には小島烏水、高頭仁兵衛、日本博物学同志会の武田久吉、河田黙、梅沢親光、高野鷹蔵、山草会の城数馬の七名が発起人となり、山岳会が発足した。

一九〇六年四月五日の「山岳会設立の主旨書」には、山岳が一国の地文及び人文に影響することの大なるを説き、諸外国に倣い、科学、文学、芸術、諸方面の研究の必要性と、山岳趣味と知識の啓発を強調している。なお、この文章の中にも、山・人と地質の関連を随所に発見することができる。

一九〇六年四月五日、日本山岳会の機関雑誌「山岳」第一年第一号が欧州の“The Alpine Journal”に倣い創刊された。目次を見て、「山嶽の成因に就て」（小川琢治）、「高根の雪」（山崎直方）、「北海道の火山」（神保小虎）、「湖沼研究の趣味」（田中阿歌麻呂）などの論説が巻頭から掲載されているので驚いた。第二号、第三年第三号には、「北海道の火山」（神保小虎）が、第六年第三号には、「日本アルプスと既往の氷河」（辻村

太郎）、「火山の地形」（大橋良一）が、第七年第三号には、「山の形に就て」（山崎直方）、第九年第二号には、「登山者の地質学素養」（神保小虎）、第十年第一号には、「桜島火山の話」（佐藤伝蔵）、第十二年第一号には、「山の生い立ち」（辻村太郎）、第十二年第二・三号には、「北海道中央高地の地学的研究」（小泉秀雄）、第十四年第一号には、「山嶽諸相」（辻村太郎）、第二十六年第三号には、「登山者のための地質学」（佐々保雄、後に十四代会長として尽力された）が掲載され、地質学雑誌か地学雑誌を想わせる。

著者はみな、明治・大正・昭和を通じて日本の地質学、地形学をリードしてこられた、錚々たる第一人者である。これは、山岳会創立の主旨書の「科学研究の必要性」に答えたものと解釈してよいであろう。人によって山の地質を明らかにしたもので日本山岳会の歩みを大きく示唆したものと思う。

一九〇六年「山岳」第一年第一号の巻頭を飾った「山嶽の成因に就て」の著者の小川琢治先生は、和歌山県に生まれ一八九六年東京帝国大学地質学科を卒業、一八九七年から一九〇八年にわたり、地質調査所技師として、日本各地の山を歩き、二〇万分の一や一〇〇万分の一地質図幅作成に貢献され、一九〇八年京都大学教授に任ぜられ、地理学や地質学教室の創設に尽力された地質学者である。小川先生はノーベル物理学賞受賞の湯川秀樹博士の厳父である。

■山を歩いて、地質を観て五十年

私は山を歩き、山に親しむことにほど遠い人間であった。子どもの頃、父と筑波山に登った記憶しかない。私は旧制武蔵高校に学び、恩師和田八重造先生の博物学から多くの影響を受け、自然に憧れ、地質学を志すことになった。

日本山岳会創立の発起人であった河田黙先生は後に山川家を継がれ、山川黙先生といわれたが、武蔵高校を私が卒業するときの校長であり、戦中戦後の困難な時代に、学校の教育・運営にも貢献された方である。

終戦の年、一九四五年四月東京大学理学部地質学科に入学した。先輩とともに、宮城県志津川地方の低い山を訪ね、皿貝坂で三畳紀のモノチスという貝を採集したことを今でも記憶している。私にとっての山・人と地質の関わりの初めであった。人とともに山を歩き、地質を教わり、科学を学ぶことを知ったのである。

大学では、山梨県下のフォッサ・マグナ地帯の第三紀層や京都府北部の由良川流域の三畳紀層の数多くの露頭について、クリノメーター（地層面、断層面などの走向、傾斜を測る携帯用の器具）により、地層や岩石の状態を観察し、ハンマーにより岩石を採取し、ルーペで観察した。あるときは岩石から、地層の地質時代決定に役立つ示準化石を発見した。地質の研究は、山を歩く野外調査と、研究室における化石鑑定や岩石薄片（岩石を普通〇・〇三ミリメートルくらいに薄くした試料）の偏光顕微鏡による観察などを繰り返し、岩石学、層序学、古生物学、構造地質学、地史学などの研究へと発展させた。

大学を卒業して地質調査所に就職して地質部に所属し、五〇万分の一や二〇万分の一地質図幅の編纂研究に携わった。終戦後、七万五千分の一からに切り替わった五万分の一地質図幅調査研究に主力を注ぐことになった。これは人、山を歩いて地質を明らかにすることであった。

一九五〇〜一九八二年にかけて、主に日本の中生代や古生代の地層の多い地域、北海道夕張山地（五万分の一幾春別岳）、北上山地（五万分の一気仙沼、石巻）、紀伊山地（五万分の一高野山）、中国山地（五万分の一但馬竹田、大屋市場、佐用）、四国山地（五万分の一八幡浜、伊予高山）、九州山地（五万分の一三田井、鞍岡、臼杵、西方、竹田、諸塚山）の調査研究に携わった。

これらの調査研究の結果は、五万分の一地質図幅、地域地質研究報告として、通産省工業技術院地質調査所から発行されている。一九六四〜一九六五年には当時の西ドイツ連邦共和国ハノーバー市にあるドイツ連邦地質調査所に客員研究員として滞在し、アルプス山脈をはじめ、ジュラ山脈、ライン山地、アイフェル高原、ハルツ山地の山々を歩き、人に教えられて、地質を学んだ。一九八七年に定年退官してからも、山々を人々とともに歩き、地質を学んでいる。山を人とともに歩き、地質を学んだ日々も、およそ二千日に及ぶであろうか。

会報六一二号の報告の中で伊藤敞氏は「山は岩石からできているが、石のことを知らなくても登山はできる。しかし何がしかの知識があれば、登山の楽しみが倍加するのは必定……」と述べておられる。

我々が山を歩くとき、山を登るとき、一歩一歩踏みしめ、必ず眼に留まるのが岩石の露頭であり、それらは地球の地殻の一部であることを認識し、それらにまつわる事柄を学ぶことが、地質を学ぶことにほかならない。機会を見つけて、山を歩き、人とともに地質を学んでいきたいものである。（元通産省工業技術院地質調査所地質標本館館長）

海外の山

K2−二つの快挙

江本嘉伸

K2（八六一一メートル）で二つの日本隊が画期的な成果をあげた。

この夏、K2には日本の二隊のほか、チリ、イタリア、イギリス、ドイツの各国隊が集結した。

このうち、単独、無酸素で「南壁ククチカ・ルート」をめざした戸高雅史（三四）は、南東稜に変更し、七月二十九日見事登頂を果たした。

イタリア隊と一緒に登った、と一時報道されたが、天候が回復した同じ日にアタックしただけで、戸高自身はあくまで単独行だった。

午前一時二十分、七八五〇メートルのアタック・キャンプを出発、氷の急斜面であるボトル・ネック（標高約八二〇〇メートル）で先行するイタリア隊の四人に追いつき、以後頂上まで時には胸までのラッセルを強いられながらひとりでルートを拓いた。午後四時二十分登頂。七時五十分には無事キャンプに戻った。

ノーマル・ルートとはいえ、世界第二の高峰に無酸素登頂した戸高の強さは、一年前のブロードピーク縦走に続き、特筆もの、と言ってよい。ちなみにイタリア隊の四人も登頂したが、うち最後に登った一人は下降中、墜落死した。

もう一つの栄光は、日本山岳会青年部K2登山隊。南南東リブ・ルートから二次にわけて計十二人が登頂するという快挙をなしとげた。K2の登攀史で一つの隊が登った人数としては前例がない多さである。

六月十六日、ベース・キャンプを設営した山本篤隊長（三三）以下十八人のメンバーは、同じルートをとるチリ隊（十一人）とテント場、フィックス・ロープの使用などについて協議し、互いに自分たちのものだけを使うことを確認しあった。

以後、七月四日C1（六四〇〇メートル）設営、同九日C2（七〇五〇メートル）、同二十八日C3（七八五〇メートル）と悪天の合間をぬって順調に高所キャンプを伸ばし、八月一日からベースでアタック態勢にはいった。

二十九日から三十一日の間アタックを考えたが、登頂メンバーをふやすためこの間をC3への荷揚げにあてたところ、十八人のメンバー中、十六人が到達してしまった。

天候待ちの後の八月十日、松原尚之副隊長（三一）以下六人の第一次隊がベースを出発、翌十一日にはC3にはいった。十二日午前二時二十分に行動を開始、午前十一時十分に三人が登頂、他の三人も一時間半以内に頂上に立った。

二次隊の山本隊長ら六人も十四日に登頂し、全員無傷で生還した。十の大学山岳部のOB、現役が参加した平均年齢二十六歳のこの登山隊、おそらく外国隊にも滅多にない若さだったが、正直のところ大方の期待以上の底力を見せた。

「平均した隊員の力では、ナムチャバルワ、マカルーの時より強かった」と山本も言う。当初「九人登頂」の予定だったが、皆強く、二次隊をいったんは「八人」にしようか、と考えたほどだった。

隊長自身若かったし、メンバーシップの問題では、複雑な面もあったらしい。が、何よりも、これだけの登頂者を出しながら無事故で下山したことを高く評価したい。

戸高はK2（北面のチョゴリも）に登った二十人目の日本人となり、リブ隊は三十二人目を生んだ。初登以来の全登頂者百三十人。K2はいつの間にか日本人の山になろうとしている。

訃報

マナスル登山隊などで活躍の千谷壮之助会員逝去

千谷壮之助（会員番号二七六七、本会元理事、第三次マナスル登山隊員）は八月八日、午前五時五十二分、入院先の川口市立医療センターにおいて、心筋梗塞により逝去されました。享年七十九歳。ここに謹んでお知らせいたします。

葬儀・告別式は、八月十二日、川口市の武蔵野・相撲典禮芝法事センターにおいて、日本大学桜門山岳会会員等が多数参列して行われましたが、本会からは村木会長以下マナスル登山隊員等が参列して弔意を表しました。

氏は戦後復刊された山日記第十四輯編集委員として活躍されたほか、昭和二十五〜二十七年、二十九〜三十一年、三十四年にかけて本会の理事として、指導、団体関係を担当。本会のマナスル登山では、一九五二年の踏査隊の派遣準備の時から、地味な梱包作業などを担当。第三次マナスル隊には中堅隊員として参加し、槙隊長を補佐して、後方支援の責任者として荷揚げ・輸送面で登頂成功に多大の貢献をされました。

［遺族］川口市根岸二〇七一−一〇
千谷雅子（夫人）　（松田雄一）

REPORT　報告　REPORT

古き道を尋ねて

秩父・妻坂峠越え

図書委員会

六月八日、集合場所の西武秩父駅から妻坂峠の登山口まではタクシーを使った。この道路は、奥に石灰石の採石場があるためダンプ街道の様相を呈している。タクシーを降りたところから少し歩くと山の神の祠があり、武甲山への分かれ道には丁目石もあって、いかにも古くから歩かれている道ということが分かる。

ここから峠までは約一時間、まだところどころ自然の林が残っていて、その若葉が目に優しく、木陰で休むと涼しい風が心地よい。ただこの辺りもいつの間にか林道の工事が進んでいて、いずれはトンネルが峠をぶち抜いて名郷に通じてしまいそうだ。この峠が静かなのも今のうちかもしれない。

峠は一面のガスであった。ここは武甲山を見るにはよいところであるが、今日はまったく見えない。しかし晴れている時は何の変哲もない平凡な峠でしかないが、このガスのため深山の趣があり、幽邃な感じさえ味わうことができた。峠にある石仏は前にはあった覆い屋が取り壊されていて裸で立っていた。ガスの中白い石膚が痛々しい。

峠で昼食後、下りは名郷へ。こちらは秩父側とは一転して、見事に手入れされた杉の植林が名郷まで続いていた。昔から西川材の名で知られ、江戸期の建物にも使用されたものである。

妻坂峠という名前から受ける印象、峠を挟んで植生が著しく異なるなど小さいながら特色を持った峠である。参加者十二名。（岩瀬晧祐）

講演会

カジタのアイゼンとピッケル

集会委員会

「カジタックス」の梶田民雄氏（本会会員）のお話を伺う会が集会委員会により企画され、七月九日、ルームで開かれた。エベレスト・サウスピラーを登った愛知学院大隊の報告にあった「（固い氷に）折れなかったのは唯一、わがカジタックスだけであった」との記述（『山岳』一九九五）が記憶に新しく、その秘密を知りたいと思い、大雨の中を馳せ参じた。梶田氏のお話の内容をかいつまんで紹介したい。

梶田氏は自ら旺盛な登攀を行い、自分が登るために考え出したものを現場で試しながら商品化してきた。

アイゼンは国内では「門田」以外には信頼できるものがなかった時代、鍛造専門の谷順治氏と板金専門の梶田氏のコンビで、商品化に取り組み、六一年「タニ」銘柄で発売。七九年にピッケルを出すまでの十八年間はアイゼン一筋だった。この間、六五年頃には、プレス十本爪、同十二本爪が全盛となり、「サレワ」と「タニ」で国内市場を二分するまでになった。

ピッケル、アイゼンに情熱を注いできた梶田氏だが、ここ四〜五年の間に、同社の商品の売上において重登山用品（ピッケル、バイル、十・十二本爪アイゼン）よりも軽登山用品（軽アイゼン、ストック等）のほうが上回るようになった。小売店からは「ピッケル一本に対して、ステッキなら百本売れる」と、その方面の商品開発を求められるが、「軽登山用品を開発してもあまり楽しくない」「今まで登攀不可能と思われていたところが新兵器の出現で成功、というような用具開発にこそ、物造りの冥利を感じる」と梶田氏は実感を込めて語った。

近年は軽量化指向で軽いものが求められる。しかし軽さと強さという相反する条件を克服するのは難しい。ピッケルやアイゼンには一般にはクロームモリブデン鋼を使うが、その特長は熱処理性（焼き入れ、焼き戻し）がよく、靱性（ねばり）が高い。欠点はマイナス三〇度辺りで急に硬化して脆くなることである。同社ではニッケルクローム鋼をベースに、極低温に耐えるよう特注した鋼材を用いてマイナス五〇度辺りまで耐え得るものを造っており、同じレベルであれば世界最強であることを期している。

鋼は熱処理の良否でその強度に大きな差が出る。どのような素材がどのように熱処理されたかは、外観からはプロでも判別不可能であり、製品の実績やメーカーを信頼する以外にない。

軽量化のために、最近ではチタンアイゼンが売り出されている。しかしアイゼンに一番要求される「曲げ強さ」は、現段階で最高の素材でもチタン合金は鉄合金の七〇パーセン

山の切手12

初登頂周年記念・Ⅰ

相山之良

モン・テギーユは、フランス南東部ドーフィネーの、ヴェルコール山群に属する奇峰である。標高は二一〇〇メートルに満たぬが、頂上は高距三〇〇メートルの断崖をなす、山名通りの〈針の山〉だ。一四九二年六月二十六日、フランス国王シャルル八世の命を受けた、侍従のアントワーヌ・ド・ヴィルらによって初登頂された。

ヴィルはかつて弩部隊の隊長で、中世の城砦攻撃の方法にならい、梯子、ロープ、鉄鉤、クサビなどの道具を駆使して絶壁を登りきった。アルピニズムの嚆矢ともいえる世界最初の人工登攀であり、詳細な登頂記録が残された最初の登山でもあった。登山史上画期的な出来事を記念して、一九九二年フランスから、初登頂五百年の切手が発行された。

アルプスの最高峰モン・ブランが、シャモニの医師パカールと、水晶採掘師バルマによって初登頂されたのは、一七八六年八月八日のことだった。それから二百年目の一九八六年には、シャモニで国際女性登山家集会をはじめとする数々の記念行事や山行が繰り広げられ、記念切手も発行された。またパカールの銅像が、駅前の目抜き通りに建てられた。

初登頂者でありながら、パカールは長い間不遇だった。パカールの成功に嫉妬した版画家で著述業のブーリーが小冊子を出版し、「パカールは疲労のあまり雪中に倒れ込んで、バルマがようやくのことで彼を山頂にひきずりあげた」と書いて中傷したからだ。事実は全く逆で、パカールはバルマをガイドではなくポーターとして同行を許し、途中でもう前進するのがいやだと言いだしたバルマを励ましながら、最初に山頂へ到達したのだった。

だがなぜかパカールの名は、登頂を企画したド・ソーシュールやバルマの名声の陰に隠されてきた。シャモニでは、その償いのため、パカールの記念碑を、ド・ソーシュールとバルマの記念碑のある場所の、通りひとつ隔てた橋の上に建設した。いまパカールの像は、手に杖、背に気圧計を担い、モン・ブランを仰いで胸を張っている。

上／1986年10月28日モナコ発行。モン・ブラン初登頂200周年記念。２人の初登頂者と登頂ルートを描く。左のド・ソーシュールは、初登頂の企画者で、自らも翌年バルマの案内で登頂した。　左／1992年６月27日フランス発行。モン・テギーユ初登頂500周年記念。モン・テギーユの山容を描く。

1937年１月18日フランス発行。ＦＩＳの世界選手権大会記念。エミール・アレの活躍でフランスが優勝。フランス派スキー術が確立された。モン・ブランが描かれた最初の切手。

1986年８月８日フランス発行。モン・ブラン初登頂200周年記念。人物は、左がバルマ、右がパカール。左はパカールが頂上まで担ぎ上げて観測した気圧計。

ト程度であり、現在のチタン合金材では必要強度は得られないので、同社ではチタンアイゼンの商品化は見合わせている。

チタンアイゼンが弱いという事実はＪＡＣナムチャバルワ隊、群馬岳連サガルマータ冬期南西壁隊、愛知学院エベレスト・サウスピラー隊の証言からも明らかだ。とくに愛知学院隊からは、国産チタンアイゼンはウエスタンクームのアイスフォール帯の通過で使用不能になり、その他のアイゼンもすべてＣ３～Ｃ４で折れたり曲がったりで使えなくなり、頂上まで無傷だったのは同社製のみだった、と湯浅総隊長から報告を受け、同社の商品開発の方向は間違っていなかったとの確信を深めたという。

（南川金一）

真夏の撮影会

浅間嶺山行

フィルムビデオ委員会

七月十四日、新装成ったＪＲ武蔵五日市駅に総勢十六名が集合し、バスで拂沢の滝に向かう。

バス停で自己紹介をし、委員長で本日の講師・羽田栄治会員から撮影のポイントや夏の注意点などを聞いて、出発する。

拂沢の滝を思い思いに撮影して、

時坂峠に向かう。今夏は空梅雨気味でこの日も大層暑く、汗をしっかりとかいて登る。時坂峠で昼食。全員の記念写真を撮って、次の集合地点浅間嶺へと向かう。木洩れ日や沢の流れなどにレンズを向けながら浅間嶺に登り、大休止とする。

次の人里（へんぼり）バス停までは、全員一団となって下る。武蔵五日市駅で解散。

暑い夏の撮影会であったが、熱心な方が多く、大変うれしく思った。

（上北和夫）

二火会・森林勉強会

身近な自然・雑木林

二火会では六月八日、森林勉強会を都立長沼公園で行った。講師は伊藤敞会員（森林インストラクター）

頂上園地で憩う勉強会の一行

京王線長沼駅に十時三十分集合。参加者十九名。

園内は野猿峠ハイキングコースの一部でもあり、ちょっとした山歩きの気分も味わえる。ゆっくりと歩いては立ち止まり、樹木を見上げ、幹を手で触れ、葉を見て、木々の名前や見分け方を教えていただく。

頂上園地で昼食後、青空のもとさわやかな風に吹かれながら、講師のお話しを伺う。身近な自然としての雑木林の意義や、放置すれば暗い照葉樹林に移行することなど。雑木林の多様性に富んだ自然を守るために薪炭林作業の復活や、里山の保全にまで話が及んだ。さらに園内を巡回し、長沼駅で解散した。

身近な自然を観察することができた貴重な一日であった。（染谷美佐子）

JAC95同期会

第一回懇親山行
奥日光白根山

●六月二十二日、晴。上野から貸切りバスで赤沼へ。ここから戦場ヶ原の木道を行く。男体山、太郎山が時折ガスに隠れるものの、新しい山仲間との会話の華やぎに心が弾む。

絵画的な光徳沼でひと休みし、牧場の脇を通り、アストリアホテルへ。ここの温泉で汗を流し、今回の目的である学習院の山荘へ向かう。ミズナラの林の小径を緩やかに上がって、明るく展けたところに小屋はあった。

小屋の前の清流に缶ビールが冷やしてある。先発の人々の心遣いがうれしい。掃除の行き届いた清潔な小屋である。食事は、プロの調理師が同期の仲間におり、彼の指導で豪勢な料理が手早くでき上がる。懇親会は、岩手や岐阜の遠方からの参加者もあり、すっかり打ち解けてあちこちから爆笑が絶えない宴となった。

八時頃から星空の下でキャンプファイヤーを囲む。紅潮した顔から歌がとびだす。一人一本ずつ願い事を言って薪をくべる。炎を見ていると、遠い日の懐かしさが込み上げてくる。皆いい顔をしている。

●六月二十三日、曇り。朝食もヘルシーメニューで元気いっぱい、お弁当のお握りも作ってくれる。

光徳牧場からバスで白根山登山口へ向かう。駐車場にバスを残して登山開始。カラマツの新緑が夕べの雨に洗われて清々しい。

やがて高度が上がるにつれて登山道にも残雪が現れてくる。地元の中学校の団体とごっちゃになって、にぎやかなこと。約二時間で弥陀ヶ池に着く。再会を楽しみにしていたシラネアオイは一本も見られない。十年前にはたくさん咲いていたのに、鹿に食べられてしまったらしい。

さあ、これから目前にそびえる本峰への急登だ。本日のハイライトである。雪渓の脇の咲き始めたばかりのショウジョウバカマが初々しい。満開のミネザクラも歓迎してくれる。最後の岩場を登りつめ、頂上に立つ。展望はイマイチ、でも満足。ちょっと下った広いところで昼食、そして記念撮影のポーズをとった。

下山は心軽く、荷も軽く、かすかに見えた至仏岳や燧岳に大喜びしながら無事駐車場へ。白根温泉に寄って汗を流し、沼田インターから帰路についた。とてもにぎやかな親睦山行だった。

（佐々木ヨシエ）

カトマンズ直行便
JAZ で行く エベレスト アンナプルナ ランタン他
ジャパンエアーチャーター
ネパール・ヒマラヤトレッキング9日間
❶11/8㈮ ❷11/15㈮ ❸12/27㈮発 ￥268,000より
運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/IATA公認代理店
アルパイン ツアーサービス 株式会社
本社／〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06-444-3033　名古屋☎052(581)3211　福岡☎092(715)1557
仙台☎022(265)4611　広　島☎082(542)1660　札幌☎011(711)7106
㈱りんゆう観光

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

青森支部

郷土の恩人を偲ぶ 第五回青森ウエストン祭

四月二十六日、第五回青森ウエストン祭が新緑の青空のもと、戸来（へらい）庭内でにぎやかに行われた。

これは明治三十五年（一九〇二）に東北地方を襲った冷害による大飢饉に際し、「青森飢饉救済基金」を設立するなど、救援活動に尽力したイギリス人宣教師、ウオルター・ウエストンを顕彰して開催されているものである。

会場にはウエストン師の肖像をはめ込んだ顕彰碑や、十六代会長山田二郎氏の言葉、駐日英国大使から寄せられたメッセージを揮毫した碑などが建ち、来場者の目をひきつけた。

式典は新郷村細川村長以下役場関係者、日本山岳会より大森常任評議員のほか青森支部会員、その他村民や一般の登山者も含め七十名が参加して行われた。

その後、山開きを兼ねて三十名が戸来岳登山を行った。ミネザクラの咲く登山道を登りきると、素晴らしい眺望が楽しめた。今年は雪が多く、この山自慢のイチイの矮性木が見られなかったが、雪の中に埋めたジュースで喉を潤し、三時半下山、来年の再開を誓って散会した。（中村勉）

ウエストン顕彰碑の前に集う参加者

山形支部

裏磐梯猫魔岳・雄国沼行

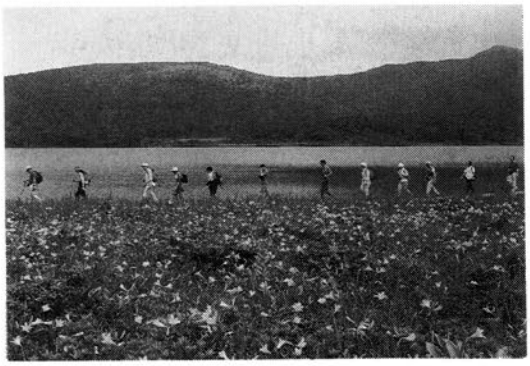
七月の山行予定は、十四日の日帰り遠出の福島県裏磐梯の雄国沼（猫魔岳経由）と決まった。

当日、県内各地より山形市内に集合、出発六時、中高年若手十五名は四台の車に分乗する。梅雨明け宣言もまだなのだが、そう悪い天気でもなさそうだ。一時はワイパーを動かす時もあったが雨は上がっていた。

米沢から大峠の長いトンネルを抜け、福島県に入る。檜原湖近くの、我々の下山予定の雄子沢口に車一台デポ。三台に分乗して八方台まで入る。日曜日と天気もまあまあのゆえか駐車場はすでに満車。それでも何とか駐車し、猫魔岳に向かう。

急坂もなく適当な登りで、各自マイペースで歩く。両側は灌木で景色も見える。振り向けば荒々しい磐梯山が雲の中で見え隠れする。

十時半に猫魔岳山頂着。眼下に目的の雄国沼が静かに光っている。対岸の湿原にニッコウキスゲのオレンジ色が輝く。休憩しばしで下山。中高年にはおあつらえむきの傾斜のようだ。湖畔道に下りると俄然人が多くなった。それぞれ眺めのよいところに陣取っている。我々も適当な場所で昼食とする。



雄国沼（後方）と湿原のニッコウキスゲ

湿原はここからもう少し先、一休みの後湿原まで歩く。木道の小規模な一周コースで、ニッコウキスゲのオレンジの絨毯、間に紫のアヤメ、小さくて見逃しがちのサワラン、ワタスゲが咲いている。ゆっくり一周、山の気、湖の気を吸う。見事な花の饗宴に未練を残しながら雄子沢口への帰路をとる。

蔵の町喜多方に立ち寄ってラーメンを食べ、下山の汗流しにと、熱塩温泉の新しい村営施設「夢の森」で入浴、さっぱりする。

今回も天気はまあまあ、山よし、仲間よし、食よし、温泉よしで午後八時に山形着。次回山行での再会を約して解散した。（佐藤節子）

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします）

カット　中村あや

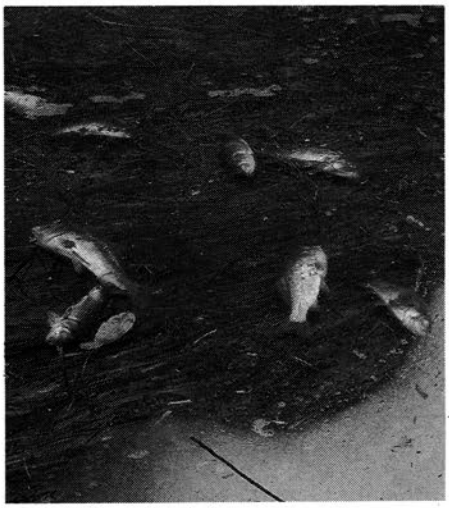
尾瀬沼・魚の大量死

小荒井実

特別天然記念物に指定されている尾瀬、文化財に例えると「国宝」といえる尾瀬沼に大量のフナが屍をさらしている。そんな情景を見たときにわが目を疑ってしまう。

一九九六年六月十三日、尾瀬沼を訪ねる。高山の湖は幽玄で、湿原の香が漂い、ミズバショウが花開き、残雪豊かな絵模様となる燧岳が写っている。浅湖湿原へと向かうと、湖面に魚の死体が浮いている。さらに付近には酸欠で苦しむ魚の大群。

死んだ魚はすべてフナ。死んで間もない魚を点検、イカリムシや魚虱はついていない。また、白雲病や尾腐れ病も認められない。魚の大群は浅瀬で盛んに「うわ水を吸う」行動を繰り返している。



岸辺に打ち上げられたフナの屍

魚は寄生虫や病気による死ではなく、明らかに酸欠状態で死んだものと思われる。集団をなして苦しむ大魚群の「うわ水を吸う」行動は、水に溶けた酸素（溶存酸素）が少なくなったときに行うもの。なぜ溶存酸素がなくなったかを考えてみよう。

①春季となり、温度の上昇に伴い、湖底や湿原の植物が腐食、大量の酸素を消費し始めたこと。このようなことは富栄養湖や腐食栄養湖では湖底がしばしば無酸素状態になることが知られている。しかし、尾瀬沼は「富・腐」栄養湖ではない。

②ミズバショウ、ニッコウキスゲ、紅葉の三シーズンに数十万の人々が押し寄せ、生活雑廃水、し尿などの不完全な処理による沼への放流、これが原因で富栄養湖に進行しつつあるのではないか。

③檜枝岐村教育長・星廣人氏のお手紙では、一九八一年の雪解け頃にも死骸は、数は不明だが見られた。村の漁業組合での調査はしていないが、大雪で湖面の開くのが遅く、魚が死んだのではないか、と記されている。

尾瀬保護財団参事・小森順吉氏に面談、氏は「湖面の凍結期間が長いため」ではないのかと話しておられる。

尾瀬沼の湖面の凍結期間について「日本の湖」（堀江正治・著）には百七十四日の記録（年月日記入なし）があると記載、本年はこれを上回るだろうと思われるが、正確な日数を私はまだつかめないでいる。

二週間後、再び尾瀬を訪ねる。湖岸の長蔵小屋の船着き場や沼辺に多数のフナの死骸、さらに浅湖湿原付近にも大量の死骸が浮き上がっていた。腐食が進み、無残な姿がミズバショウの陰に見える。

魚には申し訳ないが、自然現象であれば仕方がない。人為的な何かが原因となっているならば、魚の死の原因を調査して明らかにしてほしいと思う。

今は早く大量の雨が降ることを念じている。河川が増水して沼へ流入し、新しい水がたくさんの酸素をもたらし、魚たちが生気をみなぎらせて初夏の湖に産卵し、元気に育ってほしい。

マレーシア山岳協会とエベレスト計画

小林岳彦

ここ数か月、仕事でマレーシアとの間を頻繁に往復しています。まだキナバルをはじめとするマレーシアの山に登る機会には恵まれていませんが、マレーシア山岳協会の役員から同会の状況及びエベレスト計画の情報を得たので、ご紹介します。

マレーシア山岳協会（マウンテニアリング・アソシエーション・オブ・マレーシア）は、同国初の本格的山岳団体として一九八四年に創立されました。現在会員数約二百名（個人会員のみ）、そのうちほとんどは

トレッキングを楽しむ程度とのことですが、少数のメンバーはニュージーランド、ヒマラヤなどで経験を積み、一九九七年五月にエベレストへ遠征することになっています。

マレーシアはご承知のように常夏の熱帯の国で、最高峰のキナバル（四一〇一メートル）だけが森林限界を越えていますが、降雪をみることはなく、雪山は国内では経験できません。岩登りに関しては、首都クアラルンプール周辺にも石灰岩のゲレンデが何個所かあるものの、国内でビッグルートと呼べるようなものは開拓されていないし、水準の向上はこれからのようです。人工壁もクアラルンプールにある同会のクラブハウス（青少年スポーツ省から無償貸与）等にあります。会員と会活動はレベル1（オリエンテーション・キャンプ）からレベル4（雪氷登攀）までにグレード付けされています。年会費は邦貨約千三百円（学生四百四十円）です。

エベレストへは約二十名（うち女性二名）の隊員で、東南稜ルートから酸素を使って登る計画です。最近では一九九六年四月にプモリに登頂、八月にはインドのクルマナリ地域で数名が訓練を行っています。募金目標額は六百万リンギ（邦貨約二億六千万円）。翌一九九八年には隣国のシンガポールがオン大統領を名誉顧問として同じくエベレストに挑むという事情もあって、本計画も国家威信をかけたプロジェクトとなり、マハティール首相が後援者となって推進されています。

本計画の背景にはマレーシアの国力充実があると思いますが、登攀技術、高所医学（とくに高度順化）、気象予測等に経験が豊富とはいえないとのことなので、来春までに周到な準備が望まれます。

新生を目指す土曜会

神谷恭平

土曜会は現在会員三十六名で、この春新発足をしました。思えば半世紀にわたる由緒あるグループでしたが、昔半ドンといった土曜午後の休みを利用して、ルームに集まったのが、そもそものスタートでした。

土曜休日が定着した今日、貴重な休日にわざわざルームまで出かけてくる会員が少なくなったのも、当然のなりゆきでした。でもそんな中で会の雰囲気を愛する方々が、土曜会の灯を消さないよう守り続けてきました。

土曜会＝神谷バー＝酒呑みの会、のイメージを払拭して、もっとひと味ある会にと、真剣にその道を探っています。神谷バーとは亡父神谷恭（土曜会創立メンバーのひとり）にちなんでの会の別名です。浅草の老舗の神谷バーとは関係ありません。

現在でも毎土曜日誰かがルームに集まりますが、とくに第二土曜には万障繰り合わせて集まりましょうと、坂倉登喜子会員の呼びかけも空しく、寂しい限りです。どうか実りあるクラブライフのため、老若男女を問いません、新しい力をお貸しください。ご連絡をお待ち申し上げています。

二十年ぶりのインド

麻生由紀子

今夏（七月二十日〜八月八日）、念願のインドへ十三年ぶりで、家族四人で出かけることができました。ちょうど日印合同カメット登山（一九七六年、日本山岳会婦人部とインド女性による第二回日印合同女子登山隊。カメット＝七七五六メートルは悪天候のため断念し、アビ・ガミン＝七三五五メートルに登頂）から二十年経っていました。

カルカッタではその時のメンバーのラマが休暇を取って世話をしてくれました。子どもたちも同じ小学校五年と二年なので、一緒にインドのゲームをしたり、ハルモニウムを習ったりしました。カルカッタの喧騒を抜けて、タゴール大学のあるシャンテニケタンへ一緒に小旅行しました。のんびりとして、穏やかで心安まる地です。子どもたちはここで乗ったサイクル力車がとても気に入ったようです。

予定していたダージリンは体調を崩したので取り止め。デリーではラマの友人のラリさんがマンションとハイヤーを用意してくれていました。ちょうどＩＭＦ（インド登山財団）の会議に出席するためデリーにきていたカメットのメンバーのチャンドラとその姪で一九九三年エベレスト

東京グリーンホテル　都内に3店舗654室
各種ご宴会,ご会合にご利用下さい

水道橋店●〒101 東京都千代田区三崎町1-1-16　TEL.03-3295-4161
御茶ノ水店●〒101 東京都千代田区神田淡路町2-6　TEL.03-3255-4161
後楽園店●〒112 東京都文京区後楽1-1-3　TEL.03-3816-4161

に登頂したスマンさんと会い、ずっと一緒に過ごしました。チャンドラの住むウッタラカシ周辺のトレッキングに誘われて、心が動きましたが、まだ体調が完全に戻ったとはいえないので断念。次回は必ずウッタラカシに来るよう約束させられました。

山には行かれませんでしたが、二十年目をインドで迎えることができ、当時のメンバーとしばらく過ごせたことは、本当に幸せなことだと思います。子どもたちの間でも交流が続いてくれたら、望外の喜びといえましょう。

三田幸夫氏からの手紙

川崎精雄

三田さんからは時々短信を戴いていたが、『塾』（慶応義塾刊九六号＝昭和五十四年）を送って下さったことがある。その冊子の表紙に「先般は拙著『わが登高行』に対し過分の御書評を戴き汗顔の到りです。本日茗溪堂の坂本君が来宅、下巻の写真選びに部屋中ひっくり返しているうち、古い写真も色々出てきたので、その内少々同封御覧に入れます。古写真も一杯になり手に負えない次第。取急ぎ御無沙汰お詫び旁々以上要用のみ』と書かれていた。日付は'80・2・18。そして冊子の間には『わが登高行』に載った写真、例えば秩父宮を中心に三田さんはじめ槇有恒氏その他諸氏が楽しげに写っている芦峅寺佐伯邸に於ける一枚、マウント・アルバータ、あるいはダージリンでのポーターの写真など数葉が挟まれてあった。

この冊子には、編集部から「国内に於けるわが山行の記憶」といったような意味のものを書いてほしい、と頼まれた由で、万二郎登山、はこね山、銀山平から会津へ、雪の立山の四篇が載っているが、何れも長く然かも大変良く書かれてあるので、もし今後三田さんに関するものが発行される時は、収録されるべきと思う。

さてこの『塾』の表紙に一気に書かれた手紙を拝見すると『わが登高行　下巻』完了の喜びと、古写真にはやはり困って居られる様子が窺えて面白い。冒頭の〝書評〟云々は、上巻の図書紹介を、下手を顧みず私がしたからだった。

白神山地の旅

中村純二

五月下旬、白神山地のブナの新緑を愛でるべく青森県岩崎村を訪れた。村の白神クラブは十年程前、白神岳山頂に避難小屋を建設し、その後毎年登山道の刈り払いや清掃を行ってきた。この活動が認められ、今年は農林水産大臣賞（第八回森林レクリエーション地域美化活動コンクール）で表彰されるとともに、環境庁からトイレ建設の予算が計上されることになった。

今回は白神クラブの会員や村の社会教育課長、深浦営林署長らと白神の入山問題について話し合うことや、イヌワシ、クマゲラ、クマタカなどを見ることが目的であった。

翌朝早く、白神クラブ会長と私ども夫婦は笹内川の川原に降り立った。夜来の雨はようやくやんでいたが、山中はまだ一面のガスだった。ブナ林に入ると、ガスのためかえって奥行きが出て墨絵のような落ち着いた雰囲気が感じられる。足元にはシラネアオイ、エンレイソウ、エゾエンゴサク、キクザキイチゲ、カタクリ、オオバキスミレなどの花が咲きそろい、ヤマザクラやヤシオツツジのピンクも緑の中に鮮やかだった。

やがてブナの台地に着く。このような地形のところでは下生えが少なく、サワグルミ、カツラ、ヤマモミジなどの大木がブナに混じり、風もなく、鳥たちの巣作りにふさわしい場所と思えた。ここにはアカゲラの巣が数個あり、周りでしきりに啼いていた。

しばらく登るとブナの幹にツキノワグマの爪痕が見られるようになった。昨年はブナの実が豊作だったので、熊たちは木に登る必要がなく、落ちた実だけで腹一杯になったようで、新しい爪痕はまったく見ることができなかった。カモシカの糞もそこかしこに見られた。まさに野生動物の楽園といった感じである。

昼食時、沢に降りてアイコ、ウド、アザミなどを採り、味噌汁にして味わった。午後は支沢を溯行した。今年は積雪量が多く、間もなく雪渓の登行となる。上部の岩稜がイヌワシの巣になっているようだが、あいにくのガスのため飛翔する姿を望むことはできなかった。

夕方、クマゲラの抱卵が確認された巣のある台地に出かけた。ここはほとんど低木がなく静かな空間が広がっていて、一種のパラダイスを形成している。薄暗くなると、まずコゲラやセンダイムシクイなど小型の鳥がねぐらに戻ってくる。やがてクマゲラも戻ってきて、近くの梢の上で、特徴のある高い声で雛を呼びはじめた。五分間ほども啼いていただろうか。やがて巣に入っていった。私どもは声をひそめて立ち木の陰から遠ざかった。

夜は小さな沢の畔で野営をするこ

イラスト　宇都木慎一

短歌

滝の小屋にて

大橋克也

夕映えがまあるく四方に拡がれり鳥海の腹の滝の小屋にて

滝の小屋トウキ束ねて湯に浸す香の肩に泌む明日は鳥海

山小屋の湯煙りに沈む芍薬の匂い身に泌む還暦の夜は

鳥海の時雨走りしボケ沼にいいずな来るらし五辨の踏み跡

鳥海の千畳ヶ原の笹群に歩を沈めつつ笹鳴りを聞く

鳥海の広き笹群に点々と篝り火の燃ゆどうたん染りて

とになった。周りには枝や枯れ木がたくさん落ちている。盛んなたき火で炊事やぬれた靴下の乾燥を行った。やがて木の間越しに星が煌きはじめると、すぐ近くでブッポウソウの啼き声だ。きれいな声は食事が終わるまで続いた。

翌日はよく晴れていた。朝日が上がると、ブナやホオノキ、モミジの新緑が陽に輝いて様々な色合いを呈し、えもいわれぬ眺めだ。ただし、少し風がある。稜線をたどると、樹の枝が皆風下に向かっている地点に出た。クマゲラの巣を南側と北側に穿たれた樹齢百年余のブナの大木は、巣穴の部分から折れ、倒れていた。しかしお陰で明るくなった地表点には、すでにブナの双葉が無数に顔を出していた。これが原生林というものであろう。草むらからはヤマカガシが這い出してきた。

峠に着くとマタギ道が交差していて、ブナの幹には、昭和初期のものと思われる鉈目が見られた。同行者の名や年齢を刻んだと思われるが定かではない。行く手の倒木にヒラタケが群生していたので早速採取する。

やがて昨日見上げた岩稜の上部に達した。そこから左右に急傾斜で下る雪渓で雪崩が起こり、大きい音が谺してきた。その時頭上をイヌワシが悠々と飛んでいるのを見つけ、飽きず眺め続けた。

ここは世界遺産地域のバッファーゾーンにあたる場所だが、クマゲラやクマタカはもう少し標高の低いバッファーゾーンの外側で巣を作っているようだ。昨年秋にはイヌワシとクマタカが縄張り争いをしている姿が見受けられたという。外側地域では建設、伐採などの作業が進み、鳥たちの生存を脅かすまでになっているのだろうか。

午後、この外側地域の沢べりで、クマタカの巣を双眼鏡で確認することができた。ブナの大木の三股部分に小枝を多量に持ち込み、径二メートルにも及ぶ巣が作られていた。

これも白神クラブ会員の話であるが、夏季には西目屋村方面から遊覧のヘリが飛来し、向白神岳山頂を低空で旋回したりしていた由、これでは野生動物や鳥たちも安心できないと思われる。本会の自然保護委員会でも早急に運輸省に対し、世界遺産地域内での遊覧飛行の中止を申し立てるべきだと思った。

地元の人の話では、山菜採りはわざわざ遺産地域内まで出かけなくとも、山麓のブナ林で十分間に合うとのことだった。バッファーゾーンの外側にもこのような見事な生態系が残っている以上、ここまで保存区域を広げ、自然探究路など設ければ、コア地域は保護され、探索の実も上がって一挙両得となるのではなかろうか。

結局コア部分に踏み入るのは登山者と釣り人であるが、数の上では釣り人が圧倒的に多い。これを制限するには入山規制よりも、県道から枝分かれしている林道の全面的な車規制を行ったほうがはるかに有効である。枝分かれ林道はせいぜい一〇キロくらいの長さのものが大部分であるが、ここを徒歩で往復するようにすれば、入山者は数分の一に激減するものと思われる。入山規制の問題とともに、併せて論議されることを要望したい。

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社／酒田市上本町６－７

☎（0234）23－5111

図書紹介

カット　中村あや

高橋享夫・著
『焼石連峰の四季』

写真集『早池峰山の四季』、「栗駒山の四季』に続いて、著者（本会会員）が幼少時から望見し、親しんできた焼石連峰の自然美を、白銀の冬にはじまり、春、夏から錦繡の秋にかけて克明にとらえ、雪や氷が造り出す大自然の芸術を撮っている。

写真七十八枚。　（大橋　晋）

一九九六年五月　岩手日報社発行
一〇三ページ　二千二百円

佐竹伸一・著
『朝日連峰の四季』

山麓の朝日町で生まれ育った著者が、平成六年に朝日新聞・山形版に『朝日連峰の詩』という題で、写真と文を五十回ばかり連載したものをもとにまとめたもの。

重厚な山容と深い渓谷からなる朝日連峰が、四季それぞれにくりひろげる自然美を、優しいまなざしで見つめている。季節によって変化するブナを愛情深く描き出している。

（大橋　晋）

一九九六年二月　無明舎出版発行
一一五ページ　二千八百円

上野　巌・著
『山への想い』

人生にはそれぞれの夢がある。詩歌を好み、近隣の山々へ出かけているうち、しだいに山へとのめり込んでいく。山岳写真を撮り、そして自ら社会人山岳会を創設。北岳バットレスなど、より困難な登攀など修得、山を知り、登山を知り、岳界の専門への道を歩む。

そしていま若かったころの山々の紀行と詩歌を、山梨日日新聞、岳人やブリーズなどにコラムとして掲載、それらを一冊にまとめたのが本書である。

第一部は八ヶ岳「にゅうにて」北岳初秋「ある日のバットレス」など二十一編、第二部は詩として「或る登攀」など二十四編、第三部は甲斐駒・金峰・北岳などの随想で綴られ、そして還暦を記念して南アルプス全山縦走へと旅立つ。

ふるさとの山々を愛し、ふるさとに生きる熟年山岳家の回想として、静かな山旅を好む登山家へお勧めしたい一冊である。　（林　栄二）

一九九五年十月　山梨日日新聞社出版局発行　二三一ページ　千二百円

石川富康・著
『五十歳からのヒマラヤ四つの八千メートル峰登頂』

自分の人生の通過点を確認するためにも五十歳になったら、若い者の世話にならず、自分たちで本格的な山登りを実行しよう。行動には責任をもち、自分を見つめながらゆっくり登ろう。いわゆる自主管理登山をしよう。シルバー・タートル同人である著者は、五十四〜五十八歳の間にエベレストを含む四つの八千メートル峰に登頂。本書ではそれらの記録を中心に「より高く、より険しく、より激しく」の若き時代にもページを割いている。

序文で吉澤一郎氏は「エベレスト南稜経由登頂日本人最高齢五十七歳は偉業、その年十月に五十歳代チームでダウラギリ（八一六七メートル）登頂には呆れた……」と感嘆。

九四年春、五十七歳で南稜ルートからエベレストに立つ。頂にはそれにふさわしい人が登る、をハイライトに、八九年、五十二歳でのはじめての八千メートル峰・シシャパンマ登攀、視野狭窄のため六五〇メートルを残して引き返す。そして九一年秋、五十四歳でシルバータートル隊に参加してチョーオユー（八二〇一メートル）に新たなる挑戦。九四年秋・五十七歳で白い山ダウラギリ（八一六七メートル）に。九五年秋・五十八歳・YMS（ヤング・ミドル・シルバータートル）隊で再びのシシャパンマ（八〇二七メートル）と続く。

あとがきで、そもそも山登りとは自分にとって何であるのか、何を考えて行動したのか、自分自身を見極めたいという気持ちを表現するのは難しいものです……と述べている。

（三沢一三）

一九九六年六月　山と溪谷社発行
二七〇ページ　千六百円

川村匡由・秋本敬子・著
『ふるさと富士百名山』

わが国の最高峰である富士山、信仰の山でもあり、秀麗な山容に対する憧れか、日本国内で〇〇富士の愛称で地元の人たちに呼ばれている山が三百四十九山あるという。

その中で、山の高さや知名度よりも、それぞれの歴史や信仰の有無、

図書室受入報告（1996年７月）

著　者	書　　名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
明治大学山岳部（編）	インドヒマラヤ・ガングスタン峰海外合宿報告書1995	100pp/26cm	明治大学山岳部	1996	発行者寄贈
大分県立病院山岳会（編）	中村泰也先生追悼集	24pp/26cm	大分県立病院山岳会	1996	発行者寄贈
富山県警察山岳警備隊(編)	山岳警備隊出動せよ！	286pp/19cm	東京新聞出版局	1996	出版社寄贈
富山県警察山岳警備隊(編)	山岳警備隊出動せよ！	286pp/19cm	東京新聞出版局	1996	編者寄贈
日本大学登山隊（編）	日本大学エベレスト登山隊1995：北東稜登山報告書	254pp/27cm	日本大学	1996	発行者寄贈
日本大学実行委員会（編）	日本大学エベレスト登山隊1995：学術調査報告書	203pp/27cm	日本大学	1996	発行者寄贈
有井琢磨	氷食谷の研究：中央アルプス黒川氷食谷を例として	148pp/27cm	大明堂	1986	著者寄贈
有井琢磨	日本アルプス及び世界の諸山地における氷河地形の研究論文集	209pp/26cm	有井琢磨(私家版)	1995	著者寄贈
自然環境研究センター(編)	新・美しい自然公園(No. 13)山陰海岸国立公園「鳥取砂丘」	205pp/19cm	自然公園美化管理財団	1996	発行者寄贈
上條武	上高地（第１巻）：神河内絵画き宿	253pp/21cm	独木(まるき)書房	1996	著者寄贈
一橋大学一橋山岳部（編）	追悼・細野伸二君：剣岳遭難報告・追悼	303pp/22cm	一橋大学一橋山岳部	1990	発行者寄贈
一橋大学一橋山岳部（編）	追悼：一橋大学山岳部インド・ホワイトセール峰登山隊三君に捧ぐ	90pp/26cm	一橋大学一橋山岳部	1983	発行者寄贈
山本健一郎（編）	ロシュ・ゴル氷河の山旅：一橋大・東部ヒンズー・クシュ紀行	329pp/27cm	あかね書房	1969	編者寄贈
村上もとか	岳人列伝（文春文庫ビジュアル版　V60−39）	95pp/30cm	文藝春秋	1996	出版社寄贈
大西重紀　他（編）	山形県境縦走：完全踏破記念誌	45pp/30cm	酒田勤労者山岳会	1996	発行者寄贈
菱山忠三郎	最新山野草(ポケット図鑑)：雑草・山菜・薬草・毒草まで460種	456pp/15cm	主婦の友社	1996	出版社寄贈
大石一馬追悼編集委員会	剱窓の彼方へ：剱岳・チンネに逝った大石一馬さんを偲んで	151pp/22cm	ぶなの会	1995	発行者寄贈
近藤泰年	傷だらけの神々の山：立山・白山の自然は今	261pp/19cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
ＪＡＣ集会委員会（編）	日本山岳会集会委員会育成10周年記念誌［再刷］	60pp/26cm	ＪＡＣ集会委員会	1981	発行者寄贈
ＪＡＣ集会委員会（編）	第20回若葉会山行記念誌（1996年）	44pp/26cm	ＪＡＣ集会委員会	1996	発行者寄贈
野口邦和	山と空と放射線	238pp/20cm	リベルタ出版	1996	著者寄贈
奥多摩渓谷調査団	奥多摩・大菩薩・高尾の谷123ルート(全踏査！ルート図収録)	247pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
創元社編集部（編）	関西ハイキングガイド130コース：1/25, 000地形図利用のルートガイド	412pp/19cm	創元社	1996	著者寄贈
豊野則夫	源流のイワナ釣りガイド：飯豊・朝日・上信越・北アルプス北部から選ぶグレードつき34ルート	200pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
小泉武栄	日本の山はなぜ美しい：山の自然学への招待	228pp/19cm	古今書院	1994	出版社寄贈
橋本寿資（編）	「地理」(Vol. 41, No. 7) 特集・ヨセミテとグランドキャニオン	140pp/21cm	古今書院	1996	大森弘一郎氏寄贈
韓國山岳會（編）	韓國山岳會50年史	663pp/27cm	韓國山岳會	1996	発行者寄贈
Michael Ward et al.	High Altitude Medicine and Physiology［2nd.ed.］	618pp/25cm	Chapman & Hall	1995	購入
Donald Heath et al.	High Altitude Medicine and Pathology［4th.ed.］	449pp/26cm	Oxford Univ. Press	1995	購入
Alan Hankinson	Geoffrey Winthrop Young : Poet, Educator, Mountaineer	365pp/25cm	Hodder & Stoughton	1995	購入
Patrick French	Younghusband : The Last Great Imperial Adventurer	440pp/25cm	Harper Collins	1994	購入
Tim Madge	The Last Hero : Bill Tilman −A Biography of the Explorer −	288pp/25cm	Hodder & Stoughton	1995	購入
Annabel Walker	Aurel Stein : Pioneer of the Silk Road	393pp/25cm	John Murray	1995	購入
David Gilmour	Curzon	684pp/25cm	John Murray	1994	購入
Harish Kapadia	Spiti : Adventures in the Trans−Himalaya	216pp/25cm	Indus Publishing	1996	出版社寄贈
＜　上高地・山岳研究所受入　＞					
小泉武栄・他（編）	山の自然学入門：寒冷地形談話会20周年記念誌	178pp/21cm	古今書院	1993	出版社寄贈
橋本寿資（編）	「地理」(Vol. 41, No. 7) 特集・ヨセミテとグランドキャニオン	140pp/21cm	古今書院	1996	出版社寄贈

●訂正・前号の、本の出版社(編)『登山・ハイキング・バス時刻表』出版元は「書苑新社」の誤りでした。お詫びして訂正します。

姿態、麓の人々とのかかわりのほうを優先して百山を選んだ。

北は利尻富士から南は薩摩富士までの百名山を訪れた報告と、写真、コースタイムや問い合わせ先などのデータ部からなっている。

現地で同行した人々や麓に住む人たちとの交流が語られ、より親近感を抱かせてくれる。それにしてもこのご夫妻、ご一緒に、あるいは一人でよく歩かれたものだ。巻末に全国ふるさと富士のリストがあるが、あなたのお国自慢の富士はいかがなものかな。

（南井英弘）

一九九六年三月　山と溪谷社発行
一七六ページ　二千五百円

味の技、心でつくる

むさし坊　日比谷店
(東宝ツインタワービル９Ｆ)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊　麹町店
(有楽町線麹町駅際)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊　神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅３分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊　番町店（日本ＴＶ通り五番町交差点角）
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

INFORMATION

◆イタリア国立山岳博物館
館長との懇談会　図書委員会

八月号既報のとおりW・ウエストン収集になる明治・大正の日本の写真展が十月一〜十三日、愛知県豊田市美術館で開かれます。このコレクションは、イタリア国立トリノ山岳博物館の所蔵ですが、この展覧会を機に同館館長アルド・アルディーズィオ氏が来日します。日本山岳会生みの親であるウエストンの事績と、同山岳博物館の活動内容、ギド・レイ、ボナッティなど秀でた山岳人を生んだイタリア山岳界（会）のことなど、同館長をお招きして懇談会を開きます。

日時　十月十一日(金)　十九時〜
場所　日本山岳会集会室

◆山梨県立文学館の特別展

山梨県甲府市の県立文学館で山の文学に関係のある特別展が開かれています。俳人・前田普羅の「甲斐の山々」をはじめ、若山牧水、尾崎喜八、田中冬二、大町桂月、小島烏水、宇賀文男、深田久弥、新田次郎などの資料が展示されています。

「龍之介・牧水・普羅と八ヶ岳−北巨摩の文学」
会期　七月二十日〜十一月四日
（月曜と祝日の翌日は休館）
入館料　五百円

（図書委員・大森）

◆函南原生林で自然観察会
自然保護委員会

東京から日帰り・貸し切りバスで行く、自然観察会です。

日時　十一月十六日(土)
場所　静岡県函南町・函南原生林
交通　新宿駅八時三十分ころ発。貸し切りバスで往復の予定。
講師　山口博昭氏（森林総合研究所元所長）
参加費　バス代他　定員四十名
申込　ハガキに会員番号、氏名、住所、電話番号を明記の上日本山岳会事務局・自然保護委員会宛　十月末日までに

＊申込者に詳細案内書を送付します。

◆爽やか山行
道志・鳥ノ胸山（昭文社・丹沢）
緑爽会

最近歩きやすくなった寂峰・鳥ノ胸山に登ります。富士の冠雪には早いかも知れませんが猟期の前に出かけませんか。

日時　十月二十日(日)
コース　高尾−都留市−バス−唐沢−秋葉山−鳥ノ胸山−中山−唐沢−都留市（または藤野）
集合　中央線高尾七時四八分発河口湖行車内（都留市九時二十分発和出村行バスに乗ります）
申込　ハガキまたはFAXに氏名、会員番号、住所、電話番号を明記の上、十月十六日(水)までに山口悠紀子宛
〒一八九　東村山市萩山町五−六−二〇−三〇二
FAX・〇四二三−九五−六五六三

◆懇親ハイキングのお知らせ
95同期会

①西丹沢・畦ヶ丸ハイキング
日時　十月五日　雨天中止
費用　交通費他実費は各自負担
集合　小田急線新松田駅前バス停八時（新宿発六時三十一分）
申込及び問い合わせ　木本義雄まで
TEL・〇四八−四六四−九二四二（二十時以降に）

②晩秋の雲取山山行
日時　十一月二日〜三日
宿泊　雲取山荘（雲取山山頂より七〇〇メートル北方）
TEL・〇四九四−二三−三三三八
費用　千円（保険料、通信費、諸雑費）宿泊費及び懇親会費、交通費は各自負担
集合　秩父鉄道三峰口九時三十分
申込　往復ハガキに会員番号を併記十月二十日までに斎藤邦三宛
〒二七〇−一一　我孫子市高野山一七二−一二
問合せ　斎藤邦三　TEL・〇四七一−八四−一一七一
遠藤源太　TEL・〇三−三二〇七−一七八七　二十時以降に

◆『東海山岳・七号』発刊案内

東海支部では、このほど『東海山岳・七号』を発刊しました。外国登山の記録（隊）、外国登山の記録（個人）と随想・研究、国内登攀の紀行・随想及び年表の五章で構成されています。

クラウン、エベレストサウスピラー、チリン、ダウラギリ、シスパーレなどの登山記録をはじめ、実年高所登山者の体力測定、シルクロードの検証、モンゴルの山の案内、笈ヶ岳研究など盛り沢山な内容となっています。

一九九六年九月一日刊　A5判　本文四〇五ページ　カラー写真八ページ　頒布価格三千二百円（送料別）

興味のある方にはお頒けします。ハガキで左記へご連絡ください。

連絡先　〒四六〇　名古屋市中区富士見町八番八号　OMCビルB1
日本山岳会東海支部事務局

会務報告

七月理事会

日時　七月五日　十八時四十分〜二十時

場所　日本山岳会会議室

［出席者］村木会長、斎藤、宮下各副会長、大屋、中川、吉永、大谷、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、田邊、熊崎、大蔵各理事、川崎監事、小倉、大森、村井、大倉各常任評議員

［委任］中村副会長、宇田川理事、神崎、重廣各常任評議員

【審議事項】

㈠　中華民国山岳協会登山隊来日の件　　宮下

七月十〜十六日、蔡禮樂会長以下三十八名で来日、登山活動については神崎常任評議員が訪中して打ち合わせをした。七月十日、日比谷松本楼で歓迎レセプション。現地では信濃支部の協力をお願いする。　承認

㈡　㈶結核予防会撮影許可願いの件　　大屋

「秩父宮妃殿下を偲ぶ会」に、マナスル登頂に成功した際、秩父宮妃殿下が寄せられた直筆の書の撮影及び八十周年記念晩餐会ご臨席時の写真の撮影許可願が出された。　承認

㈢　仙台が誇る「山の先達、二人展」記念講演（八年九月十日）講師依頼について　　大屋

宮城県山岳連盟より村木会長に講師の依頼があり、村木会長が承諾された。　承認

㈣　立山博物館資料貸し出しの件　　大屋

特別企画のため、日本山岳会が所蔵する登山装備五点の写真撮影と掲載の許可願が出された。　承認

㈤　「田部井淳子展」資料貸し出しの件　　大屋

福島県山都町が主催する表記展（七月十七日〜七月二十八日）に田部井淳子にかかわる登山用具の借用願が出された。　承認

㈥　東海支部の全国支部懇談会補助金支給要請及びフォーラムのパネリスト派遣依頼について　　大屋

全国支部懇談会（十月五日〜六日）に補助金十五万円を支給、パネリストは小倉董子会員にお願いして派遣する。　承認

㈦　日ネ外交樹立四十周年に関する件　　吉永

日山協より在ネパール日本大使館の日ネ外交樹立四十周年記念事業に関する計画書が届いたが、不明な点があるため大使館に問い合わせ中である。なお、記念事業にはできる限り協力し、記念式典にも連絡があれば参加したい。　承認

㈧　故秩父宮妃殿下より日本山岳会への遺贈について　　村木

妃殿下のご遺言により寄付金一千万円の申し入れがあった。ご意思に従い基金などに組み入れ末永く活用していきたい。　承認

【委員会報告】

●青年部

K2登山隊山本隊長の連絡では六月十六日BC到着、その後降雪のため停滞、二十二日より登攀活動を開始、二十五日仮C1設営、全員元気の模様である。

●青年部・学生部

六月二十九〜三十日谷川合宿を実施、現役学生、OBほか二十八名が参加した。

●自然保護委員会

・地球環境基金より、ネパールにおけるシャクナゲを中心とした植林と森林の保全活動のために二百万円を助成する、と承諾の返事があった。

・「上高地自然を語る夕べ」を山の自然学研究会で八月三〜三十一日まで日本山岳会山岳研究所を基地として開催する。

●指導委員会

・全国大学山岳部監督会議（十一月三十日）を関西で行う予定である。

・六月三十日、谷川岳において岩登りレスキュー講習会を行い、谷川合宿中の青年部、学生部から多数の参加があった。

●図書委員会

・九月十三日、第四回「山を語る」講演会を開催する。大森薫雄講師による「槍ヶ岳診療所四十五年のあれこれ」

・九月二十七日、百年史委員会主催による講演会を開催する。師橋辰夫講師（日本古地図学会会長）による「近代登山初期における測量技師たちの活躍と功績、館潔彦氏の活動を中心として」

・十月一〜十三日、写真展「ウエストンの見た明治、大正の日本」が豊田市美術館で開催される。イタリア国立トリノ山岳博物館所蔵の写真九十四枚他。館長 Aldo Audishio氏が来日上京の場合、ルームに招待し歓談する考えである。

●科学研究委員会

・六月八日、探索山行「古代陸封植物」を実施した。

・七月三日、横山宏太郎会員（第三十五次南極観測越冬隊長）による講演会「南極観測と地球環境」を開催。

・十月三日、岩坪五郎会員による講演会「環境と森林」を予定している。

●山岳編集委員会

・山岳第九一号の編集内容案および進行状況の報告。

■会員異動

物故

芦沢　俊雄（三四四七）3・1
井上　克孝（一一九七八）6・21
渡辺　正臣（二二八一）7・8
山中　三男（五七五六）7・8
谷田川　広（一〇四九二）7・31
鈴木　勲（九〇六六）7・31
町屋　明夫（一一三四三）7・31
奥園　玲子（一一九八一）7・31

終身会員

吉田　薫（七八〇二）

山と医療

山の外傷と破傷風

河村栄二

破傷風といっても、山岳に特有のものではない。ひとたび発病すると致死率の高い病気であるから、平素から予防対策を考えておきたい。

ある日、病院の外来に、左手を白い包帯で巻いた中年の男性が訪れた。よく見ると、左手掌に10cm程の長い傷があり、すでに縫合処置を受けていた。鳳凰三山縦走中に石につまずいて倒れ、尖った岩角に手をついて手のひらが大きく裂けてしまったので、応急処置をして下山し、近くの病院で治療を受けた。化膿の兆候はない。ポケットから医師の指示メモを取り出して見せた。「第1回破傷風トキソイド0.5mℓ皮下注射済み、第2回は1か月後、第3回は1年後に……」と、適切に書かれていた。

これは、破傷風予防接種を受けていない破傷風非免疫者の場合であるが、注射を受けたか、どうか、受けたにしてもその時期まで確実に覚えている人は少ない。3回の予防接種を受けていれば、10年間くらい免疫を獲得するので安全である。中高年者に破傷風患者が多いのは、破傷風非免疫者が多いためでもある。外傷の程度によっては破傷風免疫ヒトグロブリンの注射が必要となる。

破傷風は致死率の高い病気で、いつ、どこでも罹患する危険がある。破傷風菌は土壌内の常在菌で嫌気性で増殖する特徴があり、外傷、広範囲な熱傷、挫滅創、刺創などから人体内に入り、内部で増殖して毒素を産生し、中枢神経を侵していく。口唇や舌のしびれ、開口障害、痙攣などを起こしてくる。

致死率は高く、1950年には患者1915人中死亡は1558人（81％）、70年は243人中160人（66％）と高率であったが、94年には44人中11人（25％）となり、患者発生も致死率も減少した。これは予防接種の普及による効果が顕著であったことと、最新医学などの貢献によるものである。

運悪く発症した場合には、長期にわたる人工呼吸が必要となるので、救命救急センターのような機能の高い病院での治療が一命を救う重要な選択となるであろう。

ルーム日誌

7月

1日　総務委員会
2日　アルパインスケッチクラブ
3日　科学委員会　山の自然学研究会
4日　評議員会
5日　理事会
8日　フォトビデオクラブ　アルパインスキークラブ　図書委員会
9日　二火会　集会委員会　自然保護委員会　アルパインスケッチクラブ
10日　ジャック93会
11日　集会委員会　データバンク委員会
13日　95同期会
15日　資料委員会
16日　三水会　山研委員会　フィルムビデオ委員会
17日　二火会
19日　学生部　山岳編集委員会
23日　常務理事会　自然保護委員会
24日　95同期会
25日　科学委員会　集会委員会

7月来室者545名

❖編集後記❖

◆本号の編集中に、K2登頂の朗報が飛び込みました。早速、速報としてお知らせしました。待たれるのは詳報ですが、これは隊員に書いてもらい、次号に掲載の予定です。どうぞ楽しみにお待ちください。

◆会報の広告については、平成六年度に見直しを行い、七年四月号から再出発していますが、その後の経緯についてお知らせします。現在「裏表紙」の八コマはすべて年間契約、「記事中」は年間契約が四コマ、一回契約は年に数コマとなっています。また広告料の値上げに伴い、広告収入は概算で年間百二十万円になります。改定前は約五十万円ほどでしたので、会の財政にもいささか寄与しているわけです。

会報の広告は会員の情報源としても大事なものです。ご協力のほどをお願いします。

（伊藤　敞）

日本山岳会会報　山　616号

1996年（平成8年）9月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5−4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京（03）3261−4433
振替口座　東京3−4829
発行者　村木潤次郎
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社